

思考ツールを用いたパフォーマンス課題設計

学籍番号 249336

氏 名 辻 陸斗

主指導教員 棟形 康平

副指導教員 南野 起一

1. 研究の目的

現在の高等学校学習指導要領地理歴史編（平成30年告示）では、基礎的・基本的な「知識及び技能」を、単なる理解や習得にとどめず、それらを生きて働かせて活用することを通して、三つの柱で示された資質・能力を育成することが求められている。しかし実際には、社会科は暗記科目であるという学習観が根強く、多くの生徒が機械的な暗記を中心とした学習方略を採用しており、そのことが学習項目間の関連を捉えることを困難にし、学習内容に対する有意義性を感じにくくさせていると指摘されている（進藤、2002）。

このような課題に対し、生徒が自らの思考過程を把握しやすくし、知識を用いて考える学習に取り組みやすくする手立てが必要である。そこで本研究では、思考の過程を可視化し、情報の整理・構造化を可能にする思考ツールに着目した。七里（2025）によると、思考ツールは、三つの柱に基づく学習を具体化するパフォーマンス課題との親和性も高く、知識を活用した思考や表現を支援する効果が期待される。

本研究の目的は、思考ツールを用いて思考を可視化しながらパフォーマンス課題に取り組む学習活動を通して、生徒が高等学校地理歴史科の学習を「暗記中心の学習」ではなく、「知識を活用して考える学習」として捉えるようになる可能性とその有効性を検証するとともに、パフォーマンス課題における思考ツール活用の在り方を検討することである。

2. 研究の方法

2.1. 実習校での調査の流れ

本研究は大阪府立A高等学校2年生の日本史探求選択者を対象とした。授業実践前に日本史探究に対する学習観について質問したアンケート調査を行った。その後、『蒙古襲来絵詞』の改変について扱った授業、鎌倉幕府の滅亡について扱った授業の計2時間の授業実践を行った。その授業実践を通して生徒の学習観にどのような変容が表れるかを調査するために、再度アンケート調査を行った。

2.2. 使用した思考ツール

本研究での授業実践では、黒上・小島・泰山（2012）の示す思考ツールを参考にした。『蒙古襲来絵詞』の改変を扱った授業では「情報分析チャート」、鎌倉幕府の滅亡について扱った授業では「Yチャート」を使用した。

3. 授業実践の結果

3.1. 『蒙古襲来絵詞』の改変について扱った授業実践

橋本（2018）の説を中心に、①「竹崎季長の勇猛さを印象付ける形へと改変された」という内容で書くことができている。②印象、改変の意図を踏まえて推測ができている。③史料の読み取りが適切で、記述内容に歴史的相違がない。という規準で評価を行い、解答内容の傾向について、設定したカテゴリーに基づいてコーティングを行った。その結果、「竹崎季長を勇敢な人物として印象付けるため、1人で3人のモンゴル兵と対峙する構図に人物の配置を変更した。」という内容が一定程度記述することができていた。しかし、「竹崎季長を勇敢な人物として印象付けること」という点については考えられているものの、なぜそのような印象づける必要があるかということは、解釈が困難であったことが考えられる解答結果となった。

3.2. 鎌倉幕府の滅亡について扱った授業実践

3.1.と同様に、①モンゴル襲来以後の御家人の置かれていた状況や、幕府政治に対する御家人の不満を踏まえられている。②後醍醐天皇の幕府に対する不満、討幕に受けた動きについて述べられている。③幕府の御家人や後醍醐天皇への対応、幕府内の政治体制について述べられている。④歴史的因果関係が適切に踏まえられている。という4点に基づいて評価を行い、解答内容の傾向について、設定したカテゴリーに基づいてコーティングを行った。その結果、鎌倉幕府の滅亡の背景としてほとんどの生徒が御家人の幕府に対する不満（恩賞の不十分、得宗専制政治の強化についての不満）について捉えることができおり、鎌倉幕府の滅亡の要因として幕府を支えていた御家人層の不満が幕府滅亡に大きく関与していたことを、多くの生徒が捉えることができたという結果となった。一方で、後醍醐天皇が倒幕への関わりについて十分に述べられていた生徒は半数程度であった。

3.3. 事後アンケートの結果

今回の授業を通して、日本史探究の学習を知識の暗記だけで終わらないようにすることの重要性をほとんどの生徒が感じることができ、記述式問題解答時の思考ツールの有無についてもある方がいいと答えた生徒がほとんどであった。また、任意回答で求めた感想の中には記述式問題に対する抵抗が下がったという声や他教科・他分野での使用可能性を感じている生徒もいた。

4. まとめと今後の課題

事前アンケート時点で、「暗記すれば点が取れる」という理由で、今回授業実践を行った日本史探究を肯定的に捉えていた生徒が多かった結果と照らし合わせると、暗記のみに偏った学習の捉え方に留まらず、知識を用いて考えることの重要性に気付かせる一定の役割を果たしたのではないかと考えられる。

一方で、思考ツールの導入方法や定着、運用においての課題は残っている。任意回答の感想には授業外で個人が思考ツールを活用することに難しさを感じている生徒もおり、課題の設定や授業内での支援の在り方、さらには用いるツールの選択に大きく依存することも明らかとなった。